『マムルーク』

東京大学出版会，1991年，199+xii+11頁，2,472円

花田 宇秋^{*}
HANADA Nariaki

いうまでもなく、イスラム社会の特徴の一つに人間の空間的・身分階層的流動性がある。その宗教的背景としては神の前における人間の身分差別の否定や宗規としての巡礼の存在がある。しかし、イスラムが如何にムスリムの行動を規制する宗教であるにしても、このようなイスラム社会の特徴を宗教だけで説明し得るものではない。少くともそれには歴史的・具体的考察が必要である。

さて、このようなイスラム社会の特徴を端的に象徴するのが奴隷軍人（マムルーク）の存在であった。すなわち、中央アジアなどから奴隷軍人としてエジプトに購入されてきたかれらは、奴隷身分から解放されて遂には国家権力を握り（マムルーク朝）、これを約300年間維持し、その後も社会の実質的支配者として長く存在した。このような、いわば奴隷の王朝の出現させ、そしてそれを継続させたイスラム社会の背景は何か、本書はこうした問題意識から生まれた。

著者はいう。「マムルークの存在がイスラム社会に固有な現象であったとすれば、この軍団の創設はイスラムの宗教や文化的伝統となんらかの関係をもっていたであろうか。またマムルークが1000年の長期にわたってムスリムの支配者でありつづけたことはイスラム的な歴史現象として説明されることが果して可能なのであるか。（中略）マムルーク軍人の活躍の様を明らかにすることがイスラム社会の歴史を解き明かすひとつの重要な鍵である」（まえがき）。著者も断っているように本書はイスラム社会における奴隷を包括的に扱ったものではない。それは一人の研究者の研究では不可能な領域に属する。「その意味で本書はイスラム社会の奴隷と奴隷軍人についての序論であり」、「イスラム文明の理解の仕方にかんする問題提起の書」（まえがき）である。

本書は第一章初期イスラム社会の奴隷から始って、第二章マムルーク軍人の台頭、第三章マムルークと黒人奴隷、第四章マムルーク朝社会の奴隷軍人、第五章マムルーク体制とイスラム、第六章エピソードをもって終る。

先のような問題意識は、叙述スタイル・内容においてともすれば観念・意識の先行や

* 明治学院大学一般教育部教授

Professor, Faculty of General Education, Meiji Gakuin University

史料の意図的利用に陥りがちであるか、本書はこれらとは全く無縁である。著者のこれまでの論著と同じく、叙述は非常に簡明でしかも具体的である。すなわち、著者は叙述の枠組は設定するが、可能な限り史料・生の材料を読者に提示して読者の問題関心を喚起させる。自分の意見の開陳を努めて抑制して、それを史料をして語しめようとする。これはこれまでの著者独特の歴史叙述のスタイルでもある。それは、これまで余り紹介されることもなかった史料を読者に提示するのであるが、それも著者の知る史料のほんの一部であり、その背後には膨大な史料の蓄積の存在を感じさせるものである。このことは豊富な注や巻末の史料・参考文献によっても窺い知れよう。

本書はいわゆる研究書ではないが、随所に著者のこれまでの研究成果が収められており、マムルークを題材とした著者のイスラム通史（特に社会史・政治史）でもあり、今後のイスラム研究への視座を提供するものである。